軽口居合刀

全

208
119

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

題口

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

ざやうさんうつけを、清ふ人(あり)、かひ物をさするとて、むさと
かはずとも、百の物を、そ又に有るもあらいじや、宜くで、あらうて
見て、ふよといひ有り、或見世にて、こてろをねざり、まけ後せうと
云、それあらば、火をたとれといへば、そもだこといざす、火入を座
ぐらの中へいれ、雑織をおかけて、百の物をそ又に有るも
あらひ、先あらうてみてかうといふ

四　志ハき者のる事

志ハき者あるしが、他国より家を、変えは、ゆかかれ、大切か事で
他地先も、忘いさねと云事又、白銅やくとうりければ、むす
こと、拒、ゆかかとうるぞといへば、己が、何を知て、あきしる、
あらりの、まかい宛が、無賞の、けいこと、しやるといふ

五　無くひ坊主のる事

坊主鍋かますを、大き成鍋にて、あへてゐる穴中に、足ぬ
来るかくすべき屋うかなれば、彼鍋にむかいて、そうらふ、
陀羅尼をさるへ(そもり)、先ハ何るぞといへば、足ぬ宛板乗
をしらるゝが、俄に献立が、かたりて、そものまゝ、ゆど
に、今の写りし、かまがてに、いのりかゝるといたれる

六　麁和者云事宛へ(ひ)来るる事

麁和りの御云事の、経典をしてよませらるるを、変て、
此名宗が、いや志うござりますする、おかえなされ、ませいと云、
何とて、さうハ云ぞと御なれば、金蔵(キン)(ヒチ)といくひ物のやうで
ぞしびてさこ忘ますすると云、又同しやう成男、さういやる
か、首も、中陀(ナカイン)や合(ショク)と云があつて

七　山家の志まんぢうをひろふる事

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

小家の老市にいでゝまんぢうをひろい、ねぢひねりてこれを
と、志ろず、さく店屋をよこせませうとて、尺せけをだ、なん
ぞれ、玉子であらう、あたゝめて、みよといひけをだ、まさ
よ包て、あたゝめ、二百してみれば、元がたへたり、店や、
大よおどろき、玉子から、けがたへた程よ、鬼の玉子で、ゆ
らうといふこと

八　或人小老よ毎夜とさするを

或人賀茂の、走京る、あそびぬたり、弁当をひらき、
多くれ汚る、私いだし、おれよ、先よと、云おろう、赤犬
まで、一ツ、くはへて、にぞまさ、馬ぬ、久ぞよ、ゆの犬めを、
をりしよせて、くはせいと、いひすてく、まへ、まりさへりて、
酒とのこ、さるをぞせといへば、公命、先よ、くはせよと、俗
られましたよりも、犬よくはせましたといふこと

九　ぬけまるむすこの事

或老脇物をまづらいしが、よそ分、尺辺の、状をおこし、
ゆれ物、平金に成ゆゆ、折角、吹氣を、多くすべくゆ
と、云そり、むすこ、此状をみて、平金とは、何の事ぞ
ござるといへば、親人かをるといふすじやと、そしへたり、
折うかづきて、いたりしが、友立の、口説して、まがく
志たる所へ、状をやるとて、友方中を平金に成、貝物度
ゆ、折角、吹氣を、えたるべくゆと、かいてやつた

十　田舎者京のぼりのを

或所よ、菊冥物と云、かんだん、いかつたりんだんをこそ、さ
ましたのでもうつして、ぐざけるうといふ、いかまもおこの

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

一 祇園町まえをとをりかゝる
或ときゞ通りかゝりのうりがおとこ
黒羽織と祇園町まえひろいやうなをそ
ぬけ男二人をもて、いざおれもひろいよやうなをそ
もりけり。あのさうにみまいりけるが、物のそんぢてる
ぞとそ、づくと立よりとらんとたれば、お黒羽織
ふをのそとびつくりさ、つまれ男ひ
ろやうといつて、ぬすゝぬれにそ、お織はやりてわれ、
お兄がせんぢこうそとよんでねるあいつもひろいよでをよの

二 を仰とらんをはよやるう
或時を仰とそ、二人のあ当(にんり)を使ひりをふとそれの並へ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

そさう成伯様、舞ひ候よでるとて、きやもんをかる
を見て出ひり。傍輩どもどろとまゐられバ、いそぎ
宿へかるくを見よやりた。小志さりてきてり。まさ方、
どこにあつるぞとさへど、志んだしらにたゞせてござり
ましたと云。彼伯さハがぬ顔にて、それ程どうなる
だおもしろふかいといはれる

脛口居合刀第二

一 扉和成坊主のる

或志只ぬ坊とつれ立てありく西へみ事か鯉を
捨てとをりけ里。けても見るゝか鯉か。おれをさしを
にしと。成りたいといひ出れば。坊主。さし方が一の料
理でござるといふ。只ぬあ望れて。何とてさしを
とだ。志らせられたぞといへば。ぬからぬ顔まで。いやそれ
が。道去生で。ぎやうかすきで。ござるといはれる

二 ぬ事をする男数寄にもする

或志数寄によばれて。こひへ。娘指をさして。いり
ければ。娘方。笑心に思ひ。小部にて長柄（ナガイモ）とぬきや
れといへば。かの志も。さらやれて。内でぬいてきましたる

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

をなげのことかと云(イウ)さ

三　う清宇右兵衛に志かしらる事

う清け右兵衛(ダンナ)に志かれそるをきゝて、おなじ屋う成

右、云様、そちか兵衛ハいふ志かるれとも、志かれる

男(ヨトコ)ようをとぬく屋つじやと云、志てまへ、をとぬく

かといへば、育ちしじやといふ、ちかい比らでわらう、自利

がある、あるまが志わう髪でかいはといふ

四　下京屋伯のみ

或方れお小性尻、もつてれ外す、ちらをいふこゝかひしが、

屋伯とてどろと屋お成の志やさたり、食ハ汚を

まいりをそとさふ、夕ア鯉をまいり汚しといへば、

手をちやうどうちて、見ハ扨、てきやくかと云、それを

どうしたるぞとさへば、そさて鯉よこ性尻ハ棒鞆

じやといはれる

五　屋相右使を請れる事

鴻(ハシ)玄清といふ醫右、或附をいかいしの事へ、尻葉ニ申した、

菓りれ、たし甲さて、鴻玄清、お尻廻申といへば、そ

さう右使を請れ、至れまへまて、たしばいせい、此尻葉と

云、交へたし傾城のくるたろハかい、うしぎかるやしと

いふ事へ、彼ゐしやさくられ、帰りて後、彼屋お右

を、さんぐに志かれば、おやぢいたるくハ、志かるかくおひ

つも、宗周流のぢいかいをするそうか、扨(サテ)をようと

りかしたといはれる

六　境内老御前鳥扨(ツガヒ)よくあるす

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

場の者、正月京にはなりければ、よきおろうなり、大内の、
御前に昏おがまうとて、大内に行けば、いまぐさたじま
らざりければ、此白砂を見物しけり、それを京の
者がみて、こよひは田舎者がさるそうか、絵にかいた
公家をだ見うが、生公家ハ、こよひが見初であらう
といふ、けらひの者板を立て、京の屋つハ生れてゝ、
しんぐ銅だかり見て、生銅ハ、元見をゝぬ、おのまゝハ、
生公家ゟ、生銅を見るゝがよいとて、つゐといんぐ

七　大仏ゆて者笠をひろふる

或者、年のたじめに、大仏へ手結しけるが、おがこて
立さまに、前をみまれば、ふと笠ゟ一脇ゟ笠ハめで
きき物、此来の此福なりと、そしいてぐき物く、

恨る、限なし、かゝる所に、兼ねて者来りて、ひまより
よろこびやるか、大仏のまへぐハせうく、大きな物もち
いさうこゆゑ、ふとだしぢやとおりやらだ、大こんだ
ちで、おらふ、それが冬年大仏のまで、手拭を、ひ
ろうて、内にとそきてみくれば、古師布であるさ
ゆどに

八　此房を志ぬる

或者、此公家方へもたが、ひなる方にハたし傾
城を流ひ物に、なさるゝかして、おつが祢くとい
たるゝ、ぬしぐさなるすじやと云、まさ分、こゝなん人ハ、
それを、志里やらぬか、お流がひとハ、年のよろこ
女郎、宛のすじやといへば、むじやといひしが或者

まで、このうおうおうお

万日廻向に、何ぞなあれなひをせんとおもへども、り
とでなかれだ。ぜひなしとなげきなり。同様かい
ける人。殘を五百文かして。子共のとく物を。
うれよといへだ。うしこゆりましたとてかへる。さて
万日廻向も十日おそりなれだ。殘をしたる人。おき
ないがあつてかといへだ。夫文も思うりませぬ子共
のすく物をうれよと給られてにより古人形やお
めをうりました。ふしぎなるや何とやうにうりた
ぞといへだ。うれぬこそは同理なれ。彼男給れ
なやへ夢をうるごとくに。いつ先ぞいじやうれ。ゑ
きんひちぞいとうりし

十二 拘いまひする坊主のなり

或寺の住持にどつと拘いまひするあるなり。大曹
に小僧をよびて。おまはいかるも麁相を云なかといい
ひ付られて。扨元日の朝。小僧いろりの火を吹と
て。灰をふきたて。此坊のおしまちごしに。灰がか
かりけれだ。もつての外に。氣にかけられ。めで
たく元旦をさぞハ。おしかるべしと思ひやい小僧
一旦した程に。めでそふいへとて
小僧こそ猶ふきかけるなんの去
なんでも。めでそいぞとて。よろこだれけれだ。小
僧松つけませうとて
お住持旦のたいにまゐらしやる
と申けまだ。ぎやうさん氣に無くまゐる

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

或在国の者、某年ハいたゐて、正りけりかゝる、かさ
里をせんとて、まへの年より、和長さ、猫をあつゑん、
それをかざりにし事、孫ども、子長も、打ませて、ゆゑ
同郷ゆゑ、和に、ほがさいると、いたゝせて、よ語こぶる事、
限なし、かゝる所へ、鼎和者、ひよかくと来り、はかざり
と見て、是ハ扨、珍貴、かざりやといふ、こやれ、和まれが
さいて、めてこいのと、いひけれど、いかにもく、ことしかゝ、
かゞれがさが得といふ

三　此云家宛の長屋にて咄の事

或此云家の長屋小さひやう者が、あつまりて、万の咄を志
ていたり、老人いふやう、こちらハ此云家様よ、浅かハるゝ
さかいで、うろうへ、屋ぶの中の、荒神よりハ、ましぢや、

此ねどのハ神仏ばかりの、人じやと云、それハどうした、し
さいぞといへば、先神の志やうこにハ、我々文根、仏の挖(セウ)
授にハ、せいがんじ根じやと云、又老人(ヒトリ)へそれハ、そうじや
が、かごかされ、此云家もあると云、こゝか者ハ、とひやうか、事
と云、どの云家根ぞといへば、たて、よかり三条どの
じやといふ

四　小子(チイサキ)井れ本へ落る事

或所よ、何とか志たり、子が井どへ落たり、やうく、
引上て、久三所に、ゐ志や事をよんでこいで、だぐをつれて
きしい、是ハどうぞといへば、久三所いふやう、はおだぐ、お
ちやかいかといふて、ゆりかれましき程に、おちがるといふ
これだ、見て読合せうと、いたれる程に、つれてはまゝ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

又 かさいぢ成親仁のみ

或志、振舞によん八といひ給れば、家にする人、何と池
をハ成か、一け一さいよ成よといひければ、まきより、
おやじすみいでと、一けも無用でござる、一さいあしと、
おりしやれと云、むをこいふやう、あの人ハくるしうもかいが、
主根か、文盲かみハいをぬ物でござる、一けとハ、けのみ
でござる、けを成かといふみがみ物かといへば、親仁、ぬか
ちぬかにみ、主けのけハ、知てをるよ、それがいふのハ、
腐のぢうれみで、おじやる、其腐をにてハ、至第へ、いれ
ぬかといはれる

六 山水成志洗沢するみ

さんと成志、あしが、洗沢をしまくしへど、さがへすし、
いかぢせんと、業じくりしが、女だういふやう、そなたをおふ
て、それがき物をふりして、さそ、おちをふと云、是がよ
からうとて、女房におそれくり、かくるまへ、或志ち
よかくと、来りければ、かの男だろうながら、たかう
ござるといふ

七 或志友を喧嘩をするみ

ぬけたる志、友をと、喧嘩をして、しかみ家なる国よおひ
て、家にをとりて、思ふやう、何の屋つに、よがへしハすぐず、
何とがかせんとあんじ、そりしが、扶子をおくむ、かのあいて
のかどにて、ひさ物、ま稱さぬくり、皆人おりしが、まて、
何をしやるぞといへば、あいつ先が、三年の内にハしぬるたろ
じやといふ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

一八　或親仁人に状をたのむす

或文盲なるおやぢ。他国に。むすこをもたるゝが。よめが志にしると
咲て。むすこの所へ。状を屈らるゝ。其極楽にたのまれたるが。
めいまくをいたされて。悠と。一年ゆとこのまれて。詩がらちが
あり様だ。後ると。云ませうかといへば。親仁。いやどこへも。
よりハいたさせぬ。すぐに屈りまゐる。それがこれにませう。
おなつが志んざとの。手をうつくる也。ちつとも。おぼくな。
又いりやうの老もよんだがよい。心をたつきと志て。鬼になり
て。茶をのめべくゆとこのまれた

九　小姓の本やを名へ切る

小姓に。文盲なる。極本や名。奥山へ。極本をかひにまいて。
名を。男の上のよせい咄しけるが。それハ上て極方へ。極本を
指上て。其にお云葉にかゝるといへばさそもめうがなるでご
ざるとうんしゐすれば。其時志まんらしく。此所ゞ極ことのあ。
此言比でござる。此中も。上ありこれだたて扱ようさると
て。みとれうちへよバせられ。さされ。こいやいと。作られれ
だ。天人のごとく成がうんかれどく。お出ら成を。やいく。あの本や
に。さのふんだくうゝさたる。くしがれをそらしとらせい
と作られて

十　さひやう成人のす

或侍初對面の侍小あふて。咄するとて。侍ハまたりまの
でござるといひければ。親仁すゝあて。さそもせがれが。
扉ねをゆゆして。お乳にかけさせらるゝ。屈い。そこかそ
さう志。侍ハまたり拘とハ。ざふしたるぞ。詩のお人がとが

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

たれだ。ときとかをりたといふ。とろとぬ事をする男吸て。目
素が吉峯に沢山よござるかといふ。一山の内にハどこにも
ござるといふ。をもとりにおませうといひしが。おくる
だんに来りて。ゑふ吉岑へ行て。最さが目素らしい
物ハなかるといふ。どうしやつてといへだ。木の根よわら
うとせひ。かりかへしてみましたといへて

三　火事凡迫の事

或所に火事いでさけるが諸口大勢凡乗て。とみ事し
をり。亭主云根諸をやけましたにのがるゝ事ハ。皆根
の内新でござる酒をまいりませいとて。おしかり。やがまし
きと小田池先でござるといへだ。亭主先ハ叔父の事
もいてしませぬにおれでござるといへだぬ事しうる

むすこすゝみおて。その代にそられや事ると見ふ。
こちからく来ませうといふ

四　堀川にて鍔をふる事

或者堀川にてゑるゝ比なるつだをねぎりしが。おふ
し代物なくて。堀に見ふおこさうとて。宿にかへり
小者をよびて。ひろひをとらて。いまれ鍔をとてこひと
いへだ。かしこまり。御しとて。おしかりしが。其筈にか
れどもかつらず。何と考るぞとせんぎする所へ。小よこ
によこと。鍔をとてさしかといへだ。何程最
ましても。今の凡世ハござりませぬ。けつくよいつ
だりふて。来ましたとて。どりいだしをみきだ。
くるんすのみてであつて

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

いかにとのおしまかせと。出意をとても。是ハ各別成事
じや。さうくやさいでハかなふまし。それとて。かよこれ
だ。手代おてさやうてんこ成る。扨出前ゟ言いく
おしうり。主方ハ坊主に成て。俗名でハすまぬ抱む
やとて。出世の若を百て。あれに名をすてさらせ
よと仰けまだ。その後安さんとつけたり。どの
吹百て。是ハ珍愛名じや。何くる志さいぞと仰け
れだ。ぢうとてねぐんやすきごきハ。湯に入まれ
まだ。主後そりまゐる。此男もゆゑ入ると。そり
ましまゐる。安穏でござりまゐるといふ事

七　年始に耳の吹ゑぬ事

或者年の始にいふやう私ハよひのとしから。みくが
吹ゑいでつんがうに成ましことといひられだ。里をつ
なる人それをきにかきやるか。こしらう仕合がよから
う。福清んぐめでをいぞといへだ。悦ふ事かぎり
なし。それをぬけたる者吹て。よきさうまゐ。どこ
ぞていたんと思ひ。それ分ひこ抱。ありけども。耳の
きこゑぬといふ者也なし。かくるなくへ。ふくといふ事女
がきたりけれだ。やまれれハ。清んでハなひかといふ。
あちにハかなされるとおもひて。いや此者ハあうびき
をしまするといふ事

八　黒谷門前のうつけの事

黒谷門前に居る山の庵を。よかくとをたくさて。た
そといへだ。にぎすてけれ者。こよひもきたらだ。と

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

ちつんとそなへ十人計分けしが、夜半の比に例
のごとく、とくとなく、すはやきたぞとそよ、毎(ゴト)よひ
をさとし、持をおおてさらへたり、何者ぞといへば、
ぬ人でもござらぬ、毎夜戸をたたくこと、皆是
後生のそうでござるといふ、こは何事ぞといへば、そ
てさそなへに、よあはぬ事を給ふ間、貞安の此
談義に、さく此よはかりのよぞなへおこせとの此
すゝめなれば、まいよおこしまするといふ

九　むすこ夜、ありさする事

ひやうさんがむすこを、おやぢよありさを折(セツカン)
すれども、更にもちいず、持よく血にハ狂出けるが
或時女出立をして、夜行くるをおどりくかを
びれて、へやに入、かのお立の後にておころぎてねさ
り、立になれど、おきざれば、親仁のしざまて、へ
やへ切てみれば、うなれぬ女ぜんごもしらずねてい
たり、是は何者ぞ、むすこはどこへ切たぞとせんさくす
るうちに、先をさなし、大きなうちにて、松坂こへてやつ
さといひさなせどへにげ

十　墨跡のたゝりしれる事

或先人の此すへまて、酒のさにかけ物墨跡のたゝり
があつた、先人をこうれ、麁和者にむかひ、首よりす
たらぬ物は、もてござるといふ、麁和者いかにも、さやうで
ござるといふ、先人吹百こた方も、てすきかと給ければ、
すきでござりますといふ、それもすきであつめて

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

とくと程に、れよせうとて、小性よびあつまおそく来
けれど、彼ノ雇おそ相ゆ年ませうとて、うつてへ立
くり、志ばらくして、大きたちをうへてきて、其
此お根の出すき程ござり向して、よいのがござりま
したとて、下女をいてをみれば、たこのまでおつて

江戸日本橋南壱町目
須原茂兵衛
大坂本町壱町目
板行
萬屋茂右衛

元祿十七 甲申歳
正月吉日

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

廣新輕口たれし巻一 目録

一 ねがかねる
二 八百屋ぐんだて
三 よれるをしらぬもの
四 いるあきんど
五 あてずいか人
六 にごり字をしらぬもの
七 漢おちしれいしや
八 大屋ほざのる
九 山がしがあらはれて
十 すきなれはぜひもなし
十一 屋ぬいしやのくすり

十二 おめぬがまし
十三 ものをとすれて
十四 川ががれ
十五 河ががれはひらいがら
十六 そさうな小だ
十七 かこ[illegible]のだとら
十八 かいこやうれる
十九 らう人海来のる

家新軽口をれし 巻一

第一 ねがはねる

去大名の姿殿 清田初知人 出見出しひとそ 百性貧人出むひよおたり 出仕れ待宛 大織く 故交元は こちらが西に河ゝるかと 出殿様 百性宛出殿中 大殿様の御代は こちらが東 こちらが西よて 此方が南 こなたが北にてゆえゆ 出むひよ 先殿様の西 こちらを南にて成 [illegible]して 那為をなゆとやた

二 八百屋くゞんぐそ

去八百屋 親者へ頼かけ 松久くあきかひいたしゆへ 其 其仕合にて河内迷惑仕ゆ 其よ 親者様は 慈悲第一の仏にて出来ゆよ 河とぞ 仕合致ゆ様 [illegible]

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

一七日こもりけるが、あるよれ法げに、いかに海狂よきけ、一切
宛生我（ワン）と意ずるものに福徳あるべしと云へ、海汁ハ
口が力にハとよばぬ、河方れ仏神也、たゞのめ、まづ此釈
書の書れ字紙尺よ、さいにてうけバ音（ロツヒヤク）也、さうにてうけバ
音（シヤヒヤク）也、此書れ釈書が何とて八百度がなられうぞと
おわせられる

三　よいるを志らぬもの

田舎者、京れ室町を通り時、去所にて京の町人宛、
おりて死後ニ、酒もりをしていられしが、されはやきたゆぐ
りも、めるれぬるるれば、いかかへ、あれは去氣尺や、故ハ
いつる、伽藍の池を青にして酒紙のむと云、伽藍の池
と志りたハよいが、いつもふがいか

四　いるる河さんど

さうずう里が、おかだのかたもふるし、たうぬのうすも狂いや
な里のつきりと、ちらしだうふといふこもおかしや、たゞしお
ぶろ豆腐れや法しか

五　河てずいれ本

かたことながら物たづぬる、河の志やうぎハ、ざけいさじや、それハ
いかに、たゞのぶがよかハのかくたんところすと云、たゞのぶがかく
たんにかつこと、一志んがてん卯（ユ）ぬといひれば、されがその事、
たゞのぶがかくたんにかつことなるぞ、たうぐもんなにたゞのぶ
がなりかりて、全になるこまりて、こゝのぶもかくたんを
ころをと云もたれし

六　にぐり字志らぬもの

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

さらやの商賣人の家名は、さらやと云て、則こゝ家に、こんの
のふれんにさらをそめ、かなにさらやとかいて、のふれん也、さるりの
通り見て、これ虎ハ、からかにさいまつて、詞れとらがれう
れんにあるといふて、志らぬハおかし

七　英おろしのいしや

○去ん口合のよいいしや夜に、七のづにさうおろして、ニ下
ゆへとやけれバ、りとより下手なかへにて、兼ゆ志らぬ、八の法
におろされて、病人ところがちがふと云、いやくるしから
ず、上の町がやけれバ、下の町もさつぐにより、なるしからぬと
云も、よいかゞんないひ、ぶんなり

八　ちやまぢの事

此比都へ大坂より来のぎりや、れら西風にて、といふく此風

にゆ成あげのかまやに、山海おりて、小風かゝりて、俄に舟
又ぐる、転訛ゆく氣を毒におりいて、何とゆらん云所へ、とんさく
なる人、懷（フトコロ）より紙袋をいでし、先をゆだしらへゆひ付た
まへとやす、転中の人て何ぬぞと聞けれバ、此内に和中教を
ぐりをとむるといふ

九　山伏がつらつれて

○さくゆういんとて、かどくちらいにむかげにて、ちじめて大事へ
入て、にハかに異が天ぐ夜につやかり、おごりいで、鴻原の小むさ
にゆ下だりれ見よしとや、女とおなじうしに、去射見は
やハそ自とまれる事、二世をとなじこゆへた、法とあまりし、
其に曲悔ず海ひのまにてゆへバ出いてとても志らぬ、
上にも方自れあるま、合点ゆかぬとやられバ、さくゆういん也

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

里又分之と回向いたした

丸浪人海系の事

都東山のあたりに此来の居を、引むすび、そこに、をテの鉄物をかけていられる事へ、おもひ成おかしさる浪人ゆきて、さてくきれいまちんまりと、味なすゆいかれ、志て此坊様ハそうどう家にてやましまれと、とられたれバいや私ハいしやにてゑぞりまれ、私ハ永くの浪人ものにて此ざ里ますが、何とぞ御出へ、とどりゆやうに為る事ハ、此ざりますゆいっといはれたれバ、それしそ、お里さうなものとて一服調合してやられる、かしけなしとて帰り、かしらせんじ志て、のこゆれバ、こしらより、海系とか、朱海、二ぢんせんじのこられた、二百石のかそうとかまする、数海系してより、みしき如いしやとて、右のとを里を、殿様へかしられたれど、こを来いかゆう成後ぞ、もいさいの程、秘密のゆざろう、きてまいれとて、仕立ければ、賢者、さのことんざるくすりにてもなくゆ、陣手に、きこくとくゆへしといはれた

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

十二 ゑつなゑらハ
十三 ちりむまの事
十四 楊先妃がわらいれる
十五 金銭食よするお歌

第一 入がくろの事

四条川原に、お木辰と物とて、いやもやそれハ、どうも以ぬ、今業平ともいふ屋きの女方の、尻屋柄をふぎる姿尻、かの辰と物と一ツ出して、とさえる、かゝへ法れ上まで、おさかれに、いれがくろとて、うでハあるしひさいに、水木辰の物といわるまで、海の恵ひさめと、これハ何も屋敷へハうつれぬ、何とかせんと、あんじまつひて、あける時、一人のつまいやく屋けどもとて、頃りてハ以とて、小刀屋きて、かの入がくろの上へをしかてる、お木辰と物ハ、さこ元、丹波なると、ありくとおる

二 さまふ丸の無筆

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

さはやよ大ぜいよりひとり。お撰と申けるよ。三人づれの。
一人まけて。二人の酒れなどうちお撰一ぱんとれといえ
れけれど。そもさうしんしやうもとよりすきなる事
ざるかとやけをば。あて。こを通せいでも大事のお事
さはやよ。いかさしく商ひをとめて。そして
ふたりして。お茶てうこ。皆てい
ていねいお茶れくおまちねばこれをいわれ
ますいや茶もたにあるねばこれをいわれ
ませぬといわれ
ばこれよりほかとうれよといわれ
ていもまだここらとき
ひるまつこども。皆人寄合て。そこを取さむみ
こうほかとうこども。皆人寄合て。そこを取さむみ
おとりうそぶれくがふとこ
ばかりうそぶれくがふとこ
ばかりうそぶれくがふとこ
ばか

ぐぐんの椒法りさる人にせたり。こゝ事こゝ申けるハ。きのふ
ハ。まれを何と法りてたりつゝ。皆おちこと。いを
れれバ。それハ何ぞあげゆつるものであらうといふ

六　なぞにゆきたれしむすこ

さる所に十二三に成むすこ。なぞぞゆりける比。朝夕
なぞに為に成屋法してゐける程に。おやぢ志りて
申けるハ。いきだるめがと。志りけれど。むまゝ申ける
ハ。おやぢそれといふ。こゝ申くしゆのせきたふかと申す。毎
おやぢ申さるゝハ。おやぢ。志り申ける。なぞに志をる。
ごくつぶしめと。いたれ申れど。おつと。そくいべしといふ

七　無筆なるおやぢ

さる無筆成おやぢ。よそうふこが来りて。

子れ無きにハ見すなりけ。氣のどくにおもひ。子ゝ入りけ
れバ志りて。今からよそ人ゝ知なしバ。見るゝ二ツも三
ツも。出て出てからゆけと。いたれ申れバ子申けるハ。
何なりゝ来べきに。見るゝ云出が。なるものかと申
けれバ。さしあるべしとて。それより。ぶぐんを座にかべ
たをこゝ。をきて。よそより文がくると。くぐんのかべ云へ。
あしをつきこゝ。使れ人に入せて。くれ無り成。
見るゝ申さずゆ。見かゝ申さうといたれる

八　たしらを。とる心

あるつぐり。書信する事。さる人来り。相談して。何
のたしらハ。うけとしいに。ゆとりあらぬかと。いハれれバ。
ていしゆ。私もさやうにそんじゆとて。大工をよびよせ。

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

ちせられける。その頃の程も、そのあちらはちしらも、
こゝ此角のたしらも、此たしらも、此と里あれとい
たれなれば、大工、それでハ、屋様がおちまするがと、申
しければ、大工、左の志あんハ、せなんざといゝれる

九　一息に仮前へ流いる

夏六月、名前の頃、大坂川口まで、さる人、酒におび
たゞしく忘ひて、あつさの侍に川口へおられたれば、お
ゆしびぜん、私にまたしのかけて、あをとんて、来て
其でまんとおもひゆゆれけるが、ねぶけつき、こけるや
いるや、言いびき、我やうる、私既見私我ぐすが、
こ所ゝハびぜんへと、とひけれど、そうといひける。
私とおして、追風にまかせ、びぜんへつき、かの人を

おうして、あがりぬへといひられば、見ハどこじや、び
ぜんじやといふ、何とて見へハつれてきたぞといふ、私
既、よいぐす時、そうと、おやしきやるによろて、のせて
きたといふ、扨大坂へ使有に、此人をやられけるハ、
主元の我ホが、まれらまて此所ゆゆ、こゝもとの
まれらが、我ホにて、一番がろてん、まいら
ずゆと云てゆられる

十　里やうげちがいの事

さ御所に、志やうまる此男あけるが、だくちようちまけ、お
まりさ、たてまハ、さんぐ、氣をおしく成て、牝(ツヅラ)あけるに、
ける人来りやけるハ、上の町此玄徳様ハおかうしやる、
おいしや様じやほどに、ちとアんとくとうへとやられば、

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

さいらくがもてたのこませうとてもりてこゆくをみくを
ちいける。玄徳の御申せらるゝハ、さてもとりあげこゝや
かれと申あれど、八幡まゐるくとりあげませぬと
申す。志からバ、せんぎゝと申あれバ、いやまゐこする氣
まて申ゐるとゆしこ

十一 いつみうちのを申し

さぬ人、友をよ。咄(バナサ)されゐるハ、扨くまれらがを所に、と
うおこの名人が申ゐる。いかやう小と、このこ次第に、おこ
をひろげゆゑ或ハ様の死れごとくに成た。桂校に成
とも、まちがへに成た。左口角小も、菊の死に成とも、こ
のこ次第に打ゆゑと咄に、こゝ後右へ入こ。桂へ川が
里にも附、かの咄しにあこうちこのまんとて、右の人

の所へ、さそひがてらも、いろぞや咄しのゆこうち、屋と
ふてあれとゆされければ、さそくやすいるじやが、お
御いるゝハ、今朝(ケサ)、奏の役とうけてどう屋られこと
いゐる

十二 あづなみらハ

いつそ御る年のたじめ、たらもこうも、かうしなど
して、いそびしに、さぬ所に、みらハとゆ十四の子
ゐ、朝もすがら、かるこさどくりして、朝あけ、七日の
朝ゐり、いれぶりの出るに、毎おやのゆけるハ、みらハ、
見みらハとおしられバ、おつと、おしてうけまゐやうといふ
て、ぜんをうしませける。いや見、みそじやといひければて
こそたようけることいゐる

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

十三 初むまの事

猶荷の社人、御そせうかしとられるは、正月朔日、こむまと、去ゑもして年も清ぐさ、何とも氣のどくなるにて、此氣は、中の馬を、初むまにのそだされ下されぬへと、ねがひかさるれば、朔日の馬にを、氣をせて、初馬を、三度せうといふなりと、給らるれば、いやさやうにてハ、氣なくは、たゞしめのむまハ、すてゆて、中のむまをとかとられば、いやく、まそむまハ此法度でなくぬと給ふ

十四 楊氏の事

さる所の、中ゐの女、兵人ハ、柚の者ひがすると、さくそつり、二十四時中、たりとにゆをとらやさずいれて、おいたり、尼せのあ、気いづれも、おなつもがこハ、いつもゆのにかいがする、いかさ、兵人さうなと、いかれければ、たや、何いかんをとて、袖をとる、柚子に、くざんのゆ、ころ里とおちければ、ねもかれしや、やうきひが、給らハれるといふ

十五 金城食にする事

志ゆ志ようが得まて、能、今き長老者、老ぐ、病志氣にて、無、おとろして、いられけるに、其時、ゆ易キ、此ねと乗り、内諸人をいり、長老相の此同にかくは、此そだに、方こちの、志、ふせ、おまるをければ、ぶんなかけるハ、どうして、も長老相しや、まれらハ、中男をくざいてあがけた、かけに、計なくてすてるが、如尚相ハ、ねてハ、落つても、ようとれまするといハれ、長老乃給ふ、どうしてくと

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

十二 かゝる賞物
十三 高流乃うたひ
十四 唱物法度
十五 まうぢせんさしかし

第一 修切者とんさく

ある修切者、米屋へ修行よりけり。米やの女房、と
そらしゆれくと。けんどんにゆける。高ゆきさく。やいく。
きやうにけんどんよいふものか。あさハ弘法大しのござる
とやすに。そのやうにけんどんよいたねものじやと。さんく
よしかりけり。女房まことにとおりひ。米びつへ入り。ひと
にぎりけて。先口をましやうくと。いつとより。をつかけ
けれど。かの修切者。あるゆまそも。ちろ向くとおそれ
まげけり。れしきりに。をつかけれバ。修切者。辻
雪須へ逃入りける。かの女房。戸口に立。入ましやうくと
いひけれバ。内よりかの僧。弘法大師高野山へ入ぬふ。女人

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

けつかいの事なるぞ、そこ立のけしくといいわる

二　八百屋諸家がよひ

さ海八百屋諸家へ、さいくかよひける。女郎中すハ、ゆの人ハ八百屋じやが、此事へさいくこえるがさしバなぶつて見んとて、そうしおまへ旨ハ、町ハ行(イツ)るまてゆぞ、まわるハ二条室町邊まて申れる。此商賣ハなにやまて申ざんす。うましらハ本業屋で申ざる。さいひでこざんす。大人衆ハいかゆと仕るぞ。されバ御人衆ハたゞよるといえわる

三　氣まハをとの

さるいの氣家合て、を内より、一人申けるハ、あの、此せんハ、河出てそむるぞといひられバ、を中は一人申けるハ、せうぐくに海賊のませて、血をとゝ里そむるとゆける。扨ハさやうにゆうといひける事へ、小まの、業賊おとくいでなり。かの人さそもしくおよ前ハ、里こんな人なる。まわるに業賊のませて、せうべんをとらふと云るのか、それハなるまいくといふる

四　親仁のとんさく

さる町内に、東山へ、ゆさんにもわれる。を内におやこぼれまてかつり。かのおやぢ酒にえひ、小方がしまてかつりけるが、敵町内になり、主が敵ともむるなり。むすこおもしくごちれい恵ハこうしなるふといひられバ、おやぢさらぬていまわり。今をいれぞ、小方があゆるといえわる

五　田舎人女里へ切

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

さるいなりもの。四五人づれまで。鴻原へ入れまもり。
又京院ゆきて。女郎の名をいひ。井筒屋の。夕ぐれ
屋。玉の井さゆのと。多くかめけるかのいなりもの。
扨ふさひの名にてかむるとゆゑ。さらばうらもも
かめんと思ひよりて。橋弁慶文屋とかめられだ。やそ
こゝ女人は。大夫屋をもしぞんぞ屋とは。さんぐに
志りけるとよう。ふうださゆといふ。

六　阿さねの事

さる一向宗。毎日報事にまいられける。あるとき
ねすごし。肩衣をとりちがへ。女房院のまへまれ
と。引かけ入られ。それば。道まで日行院より
あひこゝ女はいう。あるうゆえるといひければ。それは

其事いそぎまするといひけれ

七　親仁命こひ

さるおやぢ。家命をねがひ。清水にまゐでまれ百を
のじめこゝろをあらへさせ。まびし母へとて。七日
まゐでなるに。あらる七日めに。三年坂まで。白坂に
百といふじの出さる我。知られ。先しそ親者乃
仰利生と悦び。宿に坂里。兄むすこに入せ。くれ
ぞくとりられ。それば。兄清ぐぐとうんと云ゆう。
先は命こひ。なかひたるにては。所し。文字とよみ
くぎせば。一日ぐらしといふとまてゆと。いひければ。文
才いふゆう。いや。あれるはあるまい。それは。こゝろりゆけ
と。いふ事ゆとゆといふ。

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

八 給ふ五人拙雖いふ

さる人何を見ても出、ひなんばかりいふ人あり、たとへば
物理れ事までも、さんをいれるが、何る時、なぐち
二三人つれぐち、さが道へまいられるが、折節白
鷺二三羽、田のあぜにおりければ、流れの人いふ
やう、かのひなんいふ人中やう、いやく鷺のひつ
せいハ、何のやう物あれにてハないといふとやかく
いふ内に鷺飛去(サル)、又つれ中やう、何と何のとび
さる事ハ見るまでハないしといふ、又むなんいふ人いやくと
ぶひつせいハ、あれが何としてハ、何のやう物あれでハないと
いはれる

九 久三郎馬とひ喰死

さる久三郎弁当をもらうりければ、むかふより馬
とひ、馬後引まりけるが、かの弁当まひ当り、ちらだこ
ふミ王里なれば、久三郎大きに腹を立、脇指をぬ
き、かの馬を切ければ、馬をひたちを立、吹まいといさ
ひなれば、あたりれものも拾合、じやうにだうをいふけ
れば、馬もだねてだからぬ、又馬子もかんにんせよ、さ
りとさつられば、流んとおがられぬといふ

十 雷鳴をおがむ人

さる人せいちんへ切てハ、あとをおがこければ、むと子いふや
う、何とこなるハ、せつちんへ切、詞をおがましやるが、何と志
さるぞと、たづねければ、おやぢいふやう、己ハものをしらぬ
風つじやられハ大事のぞさつのもう事だやといふれる

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

十一 いなりもの、手の筋をうる事

さる田舎ゑ、京へのぼり、手の筋のうんだんにまれたるを
けれバ、いなりものゑと、此内にまれ成うはさうなとぶ称
けれど、内ゑ、おいぬ屋へ、是ハ手の筋をゑと、二代の苔
悪をいひまする、下里なるゆゑ、代物十貳匁にて、ゑと
ゑんぜうといひけれバ、志らうバゑと下されといひて、ゑ
てゑらひ、代物ゑらひ、数下の町に、是袋のうんだん金を
ゑて、是ハあし、手の筋をゑる下さうなまれ筋をゑて、是
の筋をゑねも、いづとおりひかの是袋屋へをいつて
此是ゑとゑ下と、行しと出しけれバ、多び屋ハ、是袋
をあつらゆうとおりい、ゑんをゑて、是ハ指一匁しゞや
と、いひけれど、かのいなりものの手の筋ハ指二匁しゞやが、

是の筋ハ、是もん屋すいとて、猿を清れる

十二 かゝつてこいもの

さる方に、いろは、なんそもじをしり、さてゝてゆう
もんに、こびくゞる人あり、むのじハをね文字の、んの字
と同じことじやとさてをづり、先月八日、同情素藤
忠兵衛り、お見せをゑまいり、うさひのゆんがあるしといふ
いれけれバ、何がいまするといへバ、たんらがあるかといふ
ある、おやいやそれハ所在里ゆせぬといふて、十だんばかり
れあし、これらハいまませぬといへバ、十さんだかりれ
上に、うんさん見へけるを、かの人是ハかむたむしゞやといふ
て、下と見られたれだたむしのなもあけり、是ゆど
たんらもあに、ないといやる、二をんさうなといはれる

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

十三　面流のうたひ

何がしとのとて、当面流のうたひを、おまんせるゝ合、そこへさる人、何そびまゝあられるが、例の面流うたひの、おまんいはくとゝて、此にいふやうハ、其様面流をおまんなさるれ也、これらなどハなるまいといふていふゝて、其方ハ法なるよ、たれな場へも、双林寺へもあられるゝ、とゝきゝね、稀ハ何村あれら牛ぼて、かこれおしやらぬ、おしらバうゝふてきゝさろしやれといふ、何がし夏ゐなりて、うたいはく

右のかひなをうちおとせバ、左の御手にて、六深左をとろてなげのけ今ハかなたしとおほしめしてやハ、とうゝいはく、何がし夏ゐ、じやないちがふゝといふ、何がしどのちゝを立、何のちがふたるがいらふ、おしらバおもまへの様きゝふとゆ、さて、その時此人うゝいはく

右のかひなをうちおとせバ、左の御手にて、六深左をとろてなげのけ今ハいしやがんとおほしめしてやハ、とゆられる

十四　唱物法度

○さる御大名、此地界にて、此地中、なり物法度の流れ、此地中にても、町くに者をいるし此時ゝに、つけ馬とをりけきバ、たちくとおり立て、馬子をとゝへ、見程なり物此法度のさびしい此のれの事に、そむくハ大ちやくものじやとて、さんぐにちやうちやくするゝま

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

で、めいさくにありひ、まつひらせんこあるへ（ホそれそれの気
性をもつて、秋ぬよ、進ますると、いふ、ホ、ホ、ホ、ホ、
をなれそれと、いふうゆへ、馬よ、ねひうるといふて、
なれよ出版之かさんくやとい、で、書の気まぐれ
ある、ホいふ、ホ、ホ、ホ、ホ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

十一 利根なき人おかすする
十二 こうも屋の事
十四 城請れの事
十五 西馬の火事れる
十六 大里(逆)れのる
十七 利根成夏腐うり
十八 ちじめとハちがふる
十九 東書出用人のる

露新雑口ゟ申し出し 光 口

四 正年成人、無年れ百人まで事の事

○ さる無年成人、食ざしと、かせと云てよかこを法りハ
されるゝ、先拙先を見て、これハ食をかせといふ事也、ずうハ
色事をせんとて、食つぶと、なの柴と云て居られる、
さてかの無年の人ごま成見てさんぐよちゝ成たて、
女房よいふやう、扨もく上の町れ孫れのハ、きこへぬ人
じや、うれをうりにやりたれバ、なの柴とあしつぶと
りいてくされるゝ、めしハ、ちんのこ志ゐにゝろて、なちん
をせいといふるじや、扨もくきこへぬるをいふをちらを
たてれバ、女だういやく、それハ、なちんでハ、ゆるまいゆ
ハいひのこ志ゐ、ないといふるで、出来らうといへだ、てい

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

にせしよ。あきゝ人。ひだりのたうから。是さしますといふ
て。さうづささしけれど。けりしさに。ひだりのもまく
うけと申。いつもかくを自なれど。うけさゆよ右のもにて。
右の目をふさんされど。火のわりが尺へぬと。たて。まるぞや
れなるがけしさといたれる

九　笑のあるし

さるいるるのちやのゆじや。元さうのちや入れるまれて。
なりなり。京へのぼりしるしそさいひとおもひて。あさ
しの西へ切。急くを此味の上まで。おつしへられければ。
ふるや。てうぞ。やのぼりたん。おいぬさいくなれどもか
さ給てのさいくのさめにて山の里まする程に。あそ
尺ぬせふとしたれば。そられもなしひよ。おいぬ。あさい。

いしぬといふてかつしれる

十　左座口小て恋とれ

さるさこ後に開帳者。いろくれ寝物ども恋とれの坊を
のべられけるは。是は弘法大師の作れ観音。おれなるは。
僧教大師の御作れ大黒。こそ法ぎ様が同作の十一面くん
おん。これこれこゞが左手の作。是が法然の二くずしの
会利。此おぞこあれと。息とも法ぐれは申されたれば。皆々
にくずしなりしが。此開帳者恋ゃといふ

十一　持佛に鬼の事

さぬ人。持仏のまん中に。ゑるに鬼を法くらせて。なる
にして恋敵女。恋来ハ中にをよだれ。現在者に。た
のこゝろてまつ里ゆと。ふくおこてりなく。いのりこゆゆ。あ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

人見て、扨くいた方ハ、おかしき事をいふしをき、いのとて
鬼とものこゝかされゆとゆゆへバ、いやとよ、仏菩薩は絶
如来ハこちがたしやといはれて

十二 利根のさ人物の事

さる志ほれ人、又志ほれ人の処にたしごか里に法かし
ゆへだ、安き事まてゆへども、いた方へハ寄らぬ、此たうへ
さて、のぞりて更へと、五年しけれど、扨もにくいへんじ
れ、いつて、いつが、か里によこさぬ事ハあるまいと云ゆへ、
光呂桐出清ゆへとて、やこしゆへバ、さてこそとお
りひ、安きる事此方へ出ない里ゆへといふ

十三 こゝろも屋のる事

田舎流、三条通とロ五人づれまてとをりさ夜ま、見せよ、
おやま二人いられけるに、ロ五人の流いなぐ忠にてしかくと、
志夜だらへハ、どちらへまいるをしへてくださねといふれ
られバ、笑を面へとをしへた、かたじけないとて、面へ出ない
だらにハのられんなぐとうけて、又よれ安だうれいるとさく
及び、見んとおりひて、いそられられバ、夜の店へ出、さてこそ
なぐおられん事、けしバおりひれまゝに見ぬせんとおりひ、
おられんとしけげく見られられバ、安とも大智、こゝろも
ぬけて、ぬけると見て、扨こそとおりひてどうぬけま
するといはれて

十四 城請れの事

さは大名西国通へ、城請れまゆくづりれをりて、
まうささぶらひしゆ、大坂どうとん場まて、三ヶ足の

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

十一 むこんの事
十二 かるさ打の仕方
十三 小ハ為心
十四 下ちがひの事
十五 むすこが志まんだ事
十七 いぬのまじない
十八 大仏の天地へ願立
十九 男じまん

藤新報口を明し先々
第一 金りぐひの事
さ法寺に、坊主曰、又人あ法まゐて、東ぐひまどぢゆうを
かいよとくのりつせて、小僧を法かし、身にて小僧
何成かいまいかれる、小僧中ハ、この御利ハ、すゝ習池か
さしたらバ、一川、屋らうといふ
二 法心なれ事
法心のなれ事にて、てうちん屋のうんだんかきそく
下され也とや、忘りぬど □ うれどくかきて
屋る、去りのやハ、兄ハあんどんのうんだんじやといふ
かきさる人、さてハ行てしかといふ
三 よいかけん事

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

去年のの[illegible]
入[illegible]
ハ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

たれぞ、こゝろしたらバとそんじ、さきおにいぞことゝいふ

十四 にハかゝ

にハかゝ、志やくしやうかりて、洗ひにけり、さる人
中けるやうハ、世方の洗ひ人ハ、念伝か、たゞちにいてた
まつよいつもさき方ハ志やくしやういふ、されバ、たゞす、
まさしハぞくれ附、大ぶにしやうをせんといふ、さき様
(志やうをでうまがさいてし洗ひ)ハ中ゆ、その場、今に
あけさる所に、坊主になりやすゆゆへ、その所どこし
小も、なまといんとぞんじ、かりやゆ、又ものいハざる
ハいふといふ、結状まれの奥方にも、一云中まし
きとかきそ ゆ

十五 古ちがひのゝ

さぶらの、絹三人りとめ、たゞの市にいてし、絹の下
の市をよみこびありく、さる人とみれ給ハ、うゞかしとも
いはれど、いや志つ中といふ

十六 むをこが志まんだ

さる人四五人よりて、たれし志ていられ給ハ、たれし
のうへまで、そ人いたれけるハ、まさしがおやぢハ、まい日、
てらまいり、だりして、いやされゆと、いたれけれど、皆
人、さそしそれハ、きどく成るでござると、知りてわめけ
れど、ぞ中に、むかんべつ成人ハ、これも人にわめられんと
おりひ、私がおやぢハ、むまれてよりけるこ、女のたゞを、それ
られませぬといへバ、皆人いふやう、こゝろハ、本ほうか、実子か
ととゝ、成所ど私ハ、実さてござるといふ、志られどこ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

加藤氏知福忠くばこれ同様ふこゝ

かん数ゝい男
おのもしまり
赤ない本
りんをハぞうじや
かゝぐるたなし
日なのちゑ

かまれ口数をへくが同様ふこゝ

いちゝこちら
むりしの夜
先ハどうもく
にくいあそがき
大きのちゑ
女房ふしん

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

こしがひかれぬといはれましたる

されいぜき

○ある人むしゃうやたらにされいぜきいたされるがある
とき何おりひおしけんよ里抹を水にてぬらし。
家の内の四分八分をふりまはしていたるとなるから
来りそハ何事をするといへば。彼中に御鹿を
とるといふ

ぬらしぬうたい

鹿ぬかまいをの。かなまれ徳をうたひけるよ。
見てゞらに二十者作おもしましてと。ましたゞらに

二十だんじんましてとうとふ。友ごち所てあも
めいまく子平へ二十者作ハ所おこあるといへば。かの人
ぬからぬ口で。されだしそうまやうけじんハけ
うらハしやとハかしさぬか

鳥が身すぐる

たれが何しき祝云振舞に。好仕のとの何とう
いたしけん。一人の客よ川盃をますれてひかざり
けれバ。そだにたるの下此なかき男ありて。此盃を
をじませふと云。夫ハ何さじけのふござるとそのん
でおこしける盃をいたゞきければ。是もをしじ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

今一人が云れ、平家のらくがんも尺事で行つて

口行ひ

其ゝ是日善門口に立家、宅とりが云ハ、ふハ余事(ヨソ)から
親世の所のれをこれて、忠愛な事じや行つたれど、
陳がなくてゆかなんだと云、中にらくなおやまかりのむす
こゆて、これがこちへこれだてうどよすぎ身我じやと

むなたとへ

行る儒者のむすめ子にて大学をよゝ行る、と親を選
て、宮のあてこびにおよび出よませる、お所そさうもの
尺まひ口れバいつもれどくよびおし、おぢ様へ大学

をよんできけませいと云、あいと云てよゝおかの男聞て
見ハしく理事い事、誠に云つたの子ハ皮(カハ)をたべてござる

たきさ二行が色揃ひ

春の行した、夜をきれを御ゝ二人つれて色ゝ家やへ行る、行
とかいうして出来て一人もいでぎ、ふしぎながらよを
たんたんとうつてよひ口れバ、ようく出来ておてせ足
ないなんでいなといひ口れバ、我ハふぶんと来ぬ者とてお
あなづりなさるものといふて

嵐の大海り

○夜ゆに四五人の客志めやかに物語する事(トコロ)、天井をどうさく

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

とする何ぞとおもへだ孫ずゝ也にくいやつのといふ所に
又ぐまさくひし里とも中に猫のまゝ孫が上手な男
其後に弟んといひれれば何より能にて亂ものもやかな
まぬとやおもひ人だたりと落て空く也ひり皆く
扨も上手とがとおりける所いづくともなくねこ四五疋
いちやうに上下をちやくし来り扨く志ろうとげいまハ
ゆきどく千万でござりまれ

麁和なかゝなり

笑の文言けるさものの家合源兵衛るに織よ見ゆき
くとり ひつかりしと考りてまめのやう成夜だらくと

ありおしかゝなりぐまらつきこれはたまらぬと云所に宜
たくまさひつ志ありといふ さもをけ志て居るこけける
が志だらく有てよりしく鬼がつき今のハ恨は庭に
おちると そこらの何より見ませばかゝなりまぐさう
ろうろとして忍あがらぬ やいぬしておるといふれば
水(テウズ)所ハどこにあるうらの町で見そうとおもふてつ
りんだれだ ひよんな所を清りんでのけたといふ

十人十心

吉原の紀里がよるの物に 碗のもやうハ定るをめると
云ふ心かいやしおもひにしづむと云ゆゞや いをやうな

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

やとしがきたるが。此宿を使てやがて来りたるへ
行。久留を粧たる三里に思してたりれといふへ
ましことまづかしをとゝけて。つもり。じろをまたり
てたり。又まへをまたせてゐたりがるしさすがの久留も
行為り。たぞくくしあんして。是はへりに点をしさ

おのたしまり

むかしし風流な女が通りたるを。むかふからちやぐる
かけ来りすでにかこゝろさんとしたるをおかしやすい
いしや塔をおりあるせ。こしにさいたる六寸音のかい
くちすら里ぬいて。これつゝへ。よろとかつるかのこる

そまおぢてくるなんだ。それなしして今ま。人くい馬もあい
くちといふ

赤かい事

ゆるごけ長史人志づまりて。おりてのまれをひとり味。
ちよつと来てたとちとたのこたい用が有といるゝ。
ぎながらもなんで言ますとけばこゝさてたとそ
ねまれふとんへまねかるゝいやそこへ。忘れますまいと
いふさてし正氣な人じや大事かい。ちよつとおぢやとて
りによびたぢさとよふつけてたそたりやといるゝ。
ないしかいといへだ。と言おびとをひてこしとつき

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

やがて又鉄鉢人がのぼるぞ。はまへとりたるに。爲くの
山地を。わしの丸庭人よりてるまでけろうな鉄鉢
の音とそろへ脇をすへたるが中まひすこいかまん
見人よむかいは脇ますて焼鉢ハ行さいはゆど
するねじやとそふ是ハ小判一ぬでてきると
志うしてこせられば我等文でうへてやろふ
と又志うしこと

一

○行ちこちら
行る町の名を。此中ハ町中に大ぶん盗人がもやるとて。
門番をよび当初東切ようをしめといひ付ける。
門番所。おそれなから此町へハぬすと人がもいり
てもれて行そふなものないは取どもじやに
おさだかいら成ますなといふ。名を目をむきあし
よくいやつじやと志うりながら小路になりて
此町からよその町へぬすとにゆくもいやい
むかしの夜
行る人はせいぐるいしてあとにおやふ事今ハ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

新語笑眉序

風竜水者也笔天地れも所し洗や
人らして洗かのまもおぶに黙(ダメ)里てをこし
えんいとほひるけまとも所世やはな
せ有事ず事そこから一所宣う
所れ数を集めて代一巻とはなり
ぬ開ゆくられハへ二ムミヨ人乃を笠
をぬいで頭(アタマ)をたらさ古の布袋

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

八水中の損（タメシ）
九大悲の利生
十盲人の七日祭り
十一初のかきつ祭
十二かまうこお撰

一 納其のうしろ
二 河伯（カツ）のお其口
三 鶏鳥（ケイウ）りんどう
四 春夏四天王
五 原中所の二度讀
六 閑事の藝可也
七 夜明のとりちがへ

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

八 那ハ竜（サムケ）れど口ハ大名
九 川ごし此れ
十 二 海りゝ接拶
十一 楓の志や迷
十二 日ゆ乃雑談

忍み恵眉 三

一 新有戸
二 松よ寄る銅
三 深宮が織
四 先食張郎
五 文育の桂麿
六 仏寄の宝境
七 腹を叩ゆるうさのうごし

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

八 津縁なくてひ嫌(きらせ)
九 弱のかめすぐし
十 壁上のお来口
十一 大学講釈
十二 片云棋局

笑濃さい由月雅
一 蜀江の好墨
二 寸尺のれちがへ
三 明友のうゝ答遠
四 秘本ハ眼瞼(まつげ)
五 年ハ極ぬれどおしい
六 化生のもいかいに
七 客のもあり

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

八町代の津ゆ
九[illegible]を起向に[illegible]
十 [illegible]の[illegible]し
十一 [illegible]
十二 一向宗の[illegible]な[illegible]審

咲の西は月[illegible]
一 [illegible]人のも[illegible]り
二 僕が[illegible]ハ[illegible]の姓
三 料理人のとんさく
四 [illegible]耳[illegible]
五 [illegible]
六 [illegible]の[illegible]
七 [illegible]

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

八云御しれとおう思い病れ
九直(ヨラ)してたまする商(アキナイ)
十抵夫(キコリ)の事云
十一比丘尼の心中
十二西鶴の葉情

新語第眉巻之一

一 振鉢振舞

或人振鉢振舞にゆかれ。屠る此中にて河の癖(ヒ)お。指と鼻の穴に入鼻を二三ヶ所とのと想きぬいられた。腸よハをかれぞ。其大向の家も志ろしかる。おさえんでなけれバ。こまりもて。又元のたなのおなへ。さしこまれて

二 章で志てする文字の作さ

片膝(ひざ)立て三味線をいづれ。縁がるの柱にもたれて里。寄せの。分やなひろ。こうしかしてしたくいしたくより。ぶくとすると文字せんさくしてゞる若おて。山ぞと山門かさ海で田ひだしたくさこせんのだちと云字ハ。ぞうしまとしたくだ。撥こふ云まれと。是へ出て見せる。ゆゑ云此片が志れませぬ。本屋んでござりまれる。いや本片でハ口ざりませぬ。で答ん

三 見えて新法師

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

ごさる。こういま水をくれ胸を起こしまされた男の定
紋が胸にあらはるゝものといて他へまいことて。さて
いまの役ぶるを起こし。さあらうぞ夜は浅なされ
ぞれ見ませうと。のぞ紙。まを拵て先ハしたり。紋
そしじや

九 大悲の利生

日本也国六十六郎の郎づまと。さもいろ為しくぞし
めく浅ゆたん夜国橋を通りかゝるましよれ長川の
中にさんげく六根罪障大小大小もさぞ。志かも丸
たぐ成垢離れた丹波をなしてらいたいするを。
法華の人大勢立ち通りアルゆと。浅ゆたもちと
和にも見せあへとて人の中をおしはくれだ。のき
ぞう成ぶらおものありて。夜な六十六郎めハ人を
つれのけ見るがるハ。男を見そこなかたうといふ。
むかぐらつかんで川の中へなげ入る辺だ。銀のや

大ひくまんぜ者菩薩。紫雲に乗じてあらはれ
給ひ。もつくいなくもたたの中にて。六十六郎が尾
を抱。橋の上へおしとあへだ。浅ゆたハ。宮藤の奴をこへ。
己めまくいゆつかな。さちまち銀をとれせん。うぬがせし
ごとく。川の中にとてとまぞこまいさうさ夜につきい
辺れだ。やつこ浅と銀者。口出しをだまくひ夜ハ
ぬう南安銀世者しとこなへれだ。銀者を浅
じ。なんがすくひとしても。やつこのハなりませぬ

十 盲人の七日に来り

夜服が志いてハ出ぶ。死んだも同じ事。五つ子佛がさりを
行しバ。まくひしく事もありやせんと。浅東の銀者へ
同じ事。一七日めも夜ハ寝おまこなり。行く正を殺しながら。
三歳と眠れだ。銀のや大悲銀世者殿出ひ。汝
が郎重行とぞなへてやりくし。志うし面ぐ。同出の
御来くがない。さりと思ひざしそり。五七条。東清が

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119
ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

うちつ連行るに、お撲行なく始終に行る程に、
女の方より、いかにとたく申しき男おける、所の里合
せて行本いさと鍛をかけ、女方既に組合るが是だ
しが方ハ勝負ハ知さりけり、忘いやのと云て同より高
くさしよす、お何ぞへさかしとたりこへとくれだ、
さしあげら連ていながら云様、いやく見へぬ、お
なげて見よ、左の方へなげくしくだ、左の胴腹け
やろん、右の方へなげなぞ、左の袖ざけとんな
ぞいへだ、此男なげられハせばこ通りたてくや
たりさしあぞまていながらいへやう、人をろしよ
あとよろしよ

新活恋の眉書一終

新活恋眉書 二

一 狗丹のうしろ

だまれ、喰きりてぞ、此やうな時高鈴はれだ
矣がにぐ猫ものじや、まさ何こたぜがかつてこらな
人ハ何をいや猫、まだ狗竿をあげをせねよ、いや
いやぞうでもちがひハかいと、狗上てアんれバこたせ
なり、何とがをめつてさか、此猫よハ小づかとつらぞ
といへだ又ふぐ、うなぎといへだうなぎ、是ハ
これハ抜れて何としてまれまもぞ、是よハ大
るのくりがござる、ろころ云てこさうせませうか、夫ハ
ようなれらうめしへたまへ、まづたじめのこだせハいつ
成古そ、されだ水中にたりを分して一度に懐中の
無法袋がうごきましてさかいで、こたぜというらない
ましく、相もさらへましてる古なる、又此今の袋ハ附
なぬ奥りがかつ重ましてのうろくへつぐまぐれおくりで

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

208
119

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

文化二乙丑年三月改之
持主　田中[illegible]

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

208
119

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用

国立国会図書館　軽口居合刀 208-119

ガラス使用